

部会研究

セント・ヨゼフ女子学園

弥生式遺跡調査概報

原始古代史部会

序 説

本遺跡は津市大字半田字高松、即ち本字則天寮の南
のセント・ヨゼフ女子学園の建設工事中に発見された

遺跡である。この発見以前、既に吾々は則天寮東側水
田に於て弥生式後期土器片及びサヌカイト製石鏃を採
収しており、当地域の建設工事には特に注意していた。

本年五月五日、前記学園の地下室設置工事の爲、その当時の地表面より約三米、掘り下げられたところ、工事担当者により、弥生式土器の壺、台付壺、同脚部等が発見された由を則天寮辻正次郎兄を通じて知り、県社会教育課へは調査の由を連絡し、承諾を受け直に田中弥、辻正次郎、竹面宗夫、名古宏樹の歴研諸兄及び則天寮在寮生多数の参加により調査に着手した。授業や工事進行中の爲充分に出来なかつたが、工事関係者の御厚意により、調査を進める事ができ、同月九日に一応終了した。

その後なおも工事の進行状態に注目していたところ、またまた同月十二日には、本学園運動場南西隅にて、楳水溝の南盤工事により、後期弥生式土器片等が多数発見されたので、翌十三、十四、十七、十八日と調査を行った。

本遺跡は粘土土壌シルト中に埋没しているので、遺物の掘出作業は困難を極め、その上天候の不順、工事現場での作業という種々の制約により、充分に調査は出来なかつたがその概略を以下に報告する。

調査にあつては工事関係者の理解はもとより、名古屋より紅村弘氏の来援指導を受けた事、作業には歴研諸兄姉、則天寮の多数の本学園友の応援のあつた事を記して謝意を表したい。

2 遺跡附近の地形

津市街部を貫流する安濃川及び岩田川流域の沖積平野の南部は、三十米内外の低丘陵が東面に広く津市及び久居町の境界にまたがつて続いている。この丘陵には谷頭水田がよく発達して各所に入りこんでいる。

この地域には弥生時代及び古墳時代の遺跡を多く見出す事ができる。本遺跡が占地する丘陵は前記岩田川流域の沖積平野に突出し比高十米を計り、西及び東から南にかけて谷頭水田が入り込んでゐる。

本遺跡は南に向つてなだらかに傾斜する丘陵の麓斜面に位置し、遺物包含地は現在までに二箇所しか判明していないが、他にもまだ埋没していると考えられる。これまで発見された二箇所の遺物包含地のうち便宜上、最初に発見されたものをA区、後のものをB区と呼称したい。

3 A区発見遺物とその出土状態

前記した工事により二、三米の深さをもつた遺物包含層を含むセクションがあらわれて、表土及び攪乱層が六米堆積し、その下に、遺物包含層の黒褐色土層（上層）が一、二米、更に黒土層（下層）と続いていた。猶上層と下層との向には遺物を混じない砂層の、三米程の向層が走っていた。

上層は発見したところ、土師器包含層であると思わ

れ、事実、調査以前に土師器の高杯、杯の他、多数の破片を出土していることがらも知れるのである。

発掘を行ったのは黒色層、即ち弥生式後期遺物の色含層である下層であつた。工事との関係上、下層の露呈されたレベルでもつて遺物を追求した結果、発掘区域南面隅に、急角度に外反し、一處立ち上つて、又わずかくびれて外反する口縁部左もち、胴部より口縁部に続くところにハケ目文の上に一列の爪形文を附し、更に口縁部の立上りにも同様の爪形の引掻文を有する甕の一部を見出し、すぐ東隣の同層位には、杯部の口縁を欠いた高杯が出土した。胴部は二段に六個の透孔をもち、ハケ目状の文様が二帯に施文せられており、器面は丹彩されたもののようである。他に周囲より壺の口縁部などを含む破片が多数見出された。猶、この発掘地区の東より人頭大の河原石が発見され、人為的におかれたようだが、何に使用されたかは今もつて疑問である。

(二)の下層より調査以前に壺、台付壺の略々完成品が発見されているが、器面には仕上げの細い不規則なハケ目を残し、壺の下部は煮炊きに使用されたのである。煤けていた。

又、後日、A地区の僅か南寄りの地点で、井戸掘りの工事中、器体の表面が研磨され、平行文様を帯状に

施し、三個の透孔がうがれた短い脚をもつた台付壺が出土している。

壺は後期に一般的であるような下腹部が強く張り、口縁部が急角度でもつて外反する器形をとっている。

4. B区発見遺物とその出土状態

排水溝が南北に巾、約〇、六米でもつて開鑿された為、面側溝壁に巾、約四米、深さ、〇、三米の遺物を包含した層のセクションがあらわれ、その遺物包含地域の大きさを調べるべく、それに直交に東方向へ巾約二米、長さ、約、一米の試掘溝を設けて発掘した。

先づ面側の溝壁が土坡に接続している地点で、壺、甕、高杯等々を折重つた状態で発見し、試掘溝の上層に於ては壺、高杯、上錘、石斧を出土した。石斧は砂岩系統の三角型扁平な、刃部に簡単な打欠を施した粗雑な打製石斧である。

現地表より深さ、約〇、七、〇、八米の下層位に壺、高杯に伴出したパレス・スタイルへ宮廷式土器の特徵ある口縁部の一片を見出したが、又、A区の工事株土中にも採取している。

猶、B区が発掘区域の諸々より七個の球形の土錘と等大の相当磨滅した軽石が出ているが前者は溪撈用具として使用されたものであるが、後者も溪撈に利用されたものだと考えられる。

この区域の遺物を包含した層はA区の上層である土師器包含層の暗褐色土層であり、この層上には土師器片、鉄片、須臾器碎片、同埴片を掘り出した。

この区の弥生式土器の器形、施文を見るに、A区の出土遺物と総じて類似し、壺、甕などには、黒褐色系統のハケ目を有する薄手の造りのものと、赤褐色の丹彩がほとんどされたようにも見える厚手のものとに類別でき、施文は単純で、意識的につけられたものは少くあつたとしても直線文に限られ、器形、施文ともに同一化されている。

5 結 び

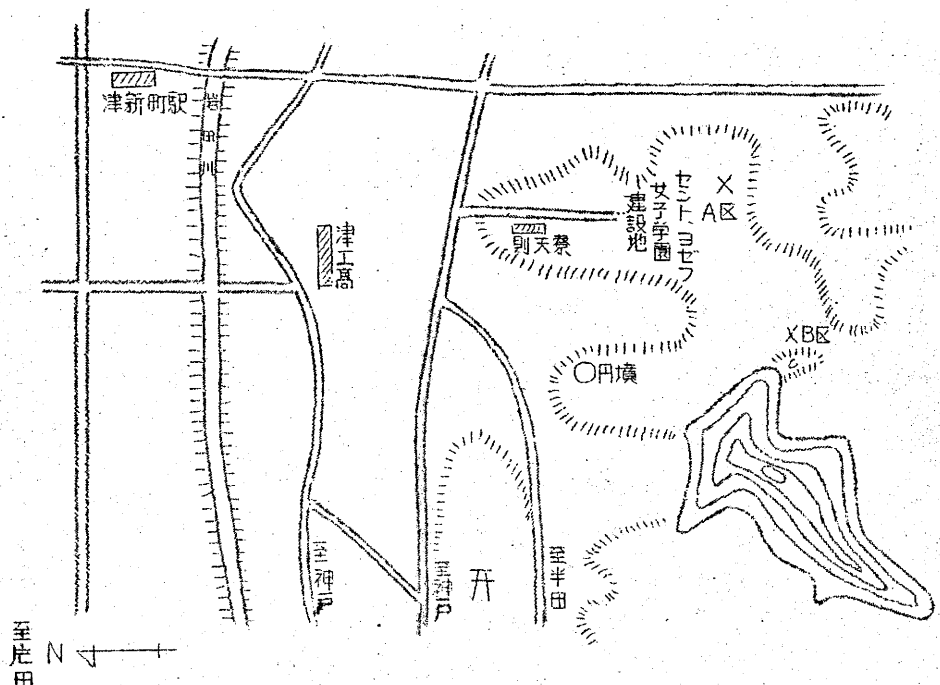
本遺跡の性格についての考察は遺物の整理後に行われようが、この調査自体、昨年度の長谷山古墳群の調査と同様、工事の進行状態に左右され、いやは追いつめられた状態のもとで行つた為、遺物を採取したに過ぎぬと言つても過言のない程であるので、甚だ疑問である。

短時間内に、しかも工事に関係する地奥のみの調査であるため、遺跡の様相を詳細に把握されないうらみがある。

この事は遺跡の規模の如何に拘らず、遺跡の所在する恐れのある地域での工事にも問題があろう。

遺跡の湮滅は、それだけその地域の原始古代史を追

求する史料の消滅を意味する以上、遺跡内での工事に
ついて、今一層の考慮が必要とさるよう(中島一丸先生)



本遺跡附近の地形略図